※令和4年度 学校評価 学校関係者評価書

三木市立自由が丘小学校

1 学校教育目標

志をもち こころ豊かに たくましく生きる子の育成　　～ 一人一人が輝き、「笑顔」あふれる楽しい学校 ～

2 本年度の重点目標

○感染症対策の徹底と教育活動の充実、行事や特別活動等の工夫
○新学習指導要領に基づく教育課程の実施、授業の工夫改善、基礎基本と主体的な学び ＜知＞
○命や人権を大切にする心、思いやりの心の育成（人権、道徳、生活など） 規範意識やリーダー性の育成、自ら課題を解決する力の育成（特別活動など） ＜徳＞
○心身の健康と日々の主体的な取組、体力の向上と多様な動きづくり（汗の出る体育） ＜体＞

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）の状況	評価	改善の方策
学習指導	○言語活動の充実 ・「未来を創る学力育成三木モデル」を念頭に、全教科を通じて対話の場を設定し、系統性を意識して言語活動の充実を図っていく。 ・豊かな国際感覚、コミュニケーション能力を身につけるため「話せる英語教育」の充実にむけて、ALTと連携をとったりフォニックスを用いた指導を進めたりする等の取組を進める。 ○わかりやすい授業の創造 ・児童に授業の見通しを持たせ、めあてを設定し、ふり返りをさせることで、学びの成果を自覚させ、主体的に学べる授業を創造する。 ・タブレットや電子黒板等の教育機器を活用したり、具体物を通しての操作活動を行ったりすることで視覚化を図り、よりわかりやすい授業を創造する。 ○プログラミング教育の推進 ・ICT機器を活用し、児童の情報活用能力の育成を図る。 ・発達段階に即したプログラミングの思考の伸長を図る。 ○基礎基本の定着 ・家庭との連携を図ったりAIドリルを活用したりする等、さらに個に応じたきめ細やかな指導を工夫する。 ・授業以外に設定した「さわやかタイム」「コグトレ（認知機能強化トレーニング）」の時間や、タブレットドリルや自主学習の取組を通して、基礎学力の定着や認知機能の強化を図る。 ○授業づくりの充実 ・思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫改善のための研修に努める。 ・講師を招聘した研修を行い、教師の指導力向上を図る。 ○家庭学習の充実 ・自主学習を行う等、主体的に学びに向かう姿勢を養う。	・指導技術の向上のため一人一回の研究授業を行い、さらに講師を招聘し、言語活動の充実を図るための研修を積んだ。 ・小中一貫教育を推進していく上で、9年間を見通した系統的な指導は、これからも研鑽を積んでいく必要がある。 ・全学年でALTと共に英語活動に取り組んだ。また、中学年以上では、フォニックスを用いた指導を進めた。 ・単元の学習の流れやめあてを掲示し、授業の見える化に努め、学習の見通しをもてるようにした。さらに学習の最後にふり返り、学びのまとめを行った。 ・タブレットPCやデジタル教材等を活用したり、具体物で操作活動を行ったりすることで視覚化を図れた。 ・算数、理科、外国語の学習でも、高学年において専科による指導を行い、専門性を生かした指導を行った。 ・「さわやかタイム」の時間を授業以外に設定し、基礎学力の定着を図った。 ・「コグトレタイム」を設定し、認知機能の強化を図った。 ・夏休みの課題や授業中などにAIドリルやタブレットドリルを活用し、復習をすることで、基礎学力の定着を図った。 ・国語科を中心に、個人思考の充実を図り、授業の中に対話を取り入れ、集団の中で思考力、判断力、表現力の育成に努めた。 ・3年生以上で自主学習を取り入れ、自主学習の手引きなどを活用して、充実を図った。1階中央廊下に、自主学習ノートを掲示し、意欲の向上を図るとともに、上級生のノートを手本とした質の向上も図った。	A	・小中9年間を見通して、系統性を意識した指導を各教科で行っていく。 ・全ての授業等を通して、言語活動のさらなる充実に向けて取組を進める。 ・全ての授業で、めあてからふり返りまでの学習の流れを定着させ、児童に単元や毎時間の見通しを持たせる。 ・漢字タイムを活用し、基礎基本の定着を図る取組を継続する。 ・タブレットPCなどの教育機器の積極的な活用を進め、個に応じた学びを充実させる。 ・児童が学習において有効にタブレット端末を活用することができるよう、指導を行う。 ・個に応じた指導をより充実させるために、児童観察を入念に行う。そして、必要があれば家庭と連携し、よりよい指導について共通理解を図る。 ・ALTと連携し、フォニックスをより推進するなど、外国語活動や外国語の指導の充実を図る。 ・高学年において専科による専門的な指導を引き続き行う。 ・教科横断的に思考力、判断力、表現力を育成するための年間指導計画の作成を進めていく。 ・プログラミングの思考をどの教科でも意識し、指導をする。 ・自主学習では、授業と繋がりのある内容に取り組む児童が増えたので、その取り組みを広げ、質の向上をさらに図りたい。
特別活動 生徒指導	○学校生活の向上 ・「4つの大切なこと」「4つの大事な環境」をはじめ、自分の学校や学級をより良くしていこうとする意欲や態度、実践力をさらに育てる。 ○落ち着いた生活習慣の育成 ・落ち着いて1日がスタートできるよう、朝の活動を大切にする。 ・児童が教師と話しやすい雰囲気をつくり、可能な限り児童と共にいる時間を増やし、内面理解を深める。 ○望ましい人間関係の形成 ・コロナ禍の中でも、できることを自ら探し創意工夫しながら、代表委員会活動、異学年交流を行うことで、学級活動や児童会活動などより一層充実させ、児童の自主性を育む。 ・学校いじめ防止基本方針の取組内容を計画的に推進することで、よりよい人間関係を育んでいく。 ・挨拶はより良い人間関係の形成にとって重要であることを理解させ、率先して挨拶をする児童を育てる。	・児童会活動や委員会活動を中心に学校生活全体で「4つの大切なこと」「4つの大事な環境」を大切にした学校風土づくりに努めた。今年度は学期初めに「自由っ子のきまり」について学級指導するようにしたことで、決まりに対する意識が向上した。 ・高学年が中心となって学校生活をより過ごしやすくするために、児童会や委員会の活動の活性化を図った。一定の効果もあったが、今年度もコロナの影響もあり、活性化しにくい時期もあった。 ・朝の活動（読書と腰骨タイム、漢字タイム、児童朝会）が定刻通り落ち着いて始められている。 ・可能な限り児童と共にいる時間を増やし、児童が教師と話しやすい雰囲気をつくることができるよう心がけた。しかし、コロナの影響で検温や消毒等、業務量が増え、子どもたちと余裕を持って向き合える時間が取りにくい状況となっている。 ・地区児童会後の時間や自由小フェスなどの異学年交流を図り、児童が計画的・主体的に取り組めたが、学年相互の学習の交流が以前と比べ少なくなっている。学習成果物の発表をするなどの活動を行いたかったが、今年度もコロナの影響で一堂に会することが難しかった。 ・定期的に生活アンケート等をとり、問題の早期発見を心がけた。また、教職員間、SCや関係諸機関とも連携し、組織的に活動した。 ・挨拶の積極性が地区ごと、もしくは児童ごとに大きな差があるように感じる。高学年の挨拶への姿勢が下級生に影響を及ぼしている。	B	・主体的に行動ができる児童を育てるため、異学年の交流や活動を自由小フェスなどに加え、日々の学習の成果の共有や報告会などを設定するなどして、充実させていく。 ・学校生活向上のためのクラス等での取組（生活目標の振り返り、ハートフル運動等）を継続して行っていく。挨拶に関しては特に重点的に取り組めるよう、毎月の生活目標に含むなどの新たな方策を考える。 ・心地よい静けさの中で行う「さわやかタイム」を継続して実施する。 ・問題行動の予防、早期発見、早期対応、児童の内面理解に継続して組織的に取り組んでいく。不登校傾向児童の対応にも、学校全体で対応する。（SC・学年間の連携、アンケートや教育面談の定期的な実施等） ・児童会活動や委員会活動を児童が、できることを創意工夫しながら、計画的・主体的に取り組めるようにさらに充実させ、児童の主体性や自己有用感の向上をめざし、よりよい学校文化を創造する。 ・「4つの大切なこと」や生活目標について、朝の会を有効活用し意識づけをはかる。加えて、生活委員会の児童に児童朝会で決まりや挨拶に関する意識づけの声掛けをさせる。また、長期休業前にネット利用について、長期休業後に「自由っ子のきまり」についての確認を行う。
道徳 人権教育	○人権が大切にされる学級・学校づくり ・日常的に自他の人権を尊重し、相手を認め支えようとする人間関係を育む指導を行う。 ・人権週間を設定し、三木市指定教材を扱う人権参観（4年生以上）やホームページ、通信を通して家庭に啓蒙したり、兵庫県版道徳教育副読本を親子で読んだりする等、保護者にも考える機会を提案する。 ・人権週間で他者の良い所を認め合う活動をすることを通して、自尊感情や思いやりの心を育む。 ・ネットモラルに関して講師を招聘した学習を行ったり、インターネット教材や映像を用いた指導を行ったりすることで道徳的判断力を高める。 ・スクールカウンセラーによる研修を実施して、児童の内面理解に基づいた指導法について研修する。 ・新型感染症による誹謗・中傷等の新たな人権課題についての正しい理解と問題解決に向けて考える指導を行う。 ○道徳的実践力の育成 ・教科書「いきるちから」や兵庫版道徳教育副読本を活用し、道徳性の涵養を図り、体験活動を通して道徳的実践力が育つ指導のあり方について研修を深める。 ・道徳的実践力を育てる「考え、議論する」道徳授業の在り方等について、道徳教育の要となる道徳科の充実を図る。	・全教育課程にわたり、人権を大切にして教育活動を行った。 ・全教育活動を通じて、学年・学級づくり、仲間づくりに取り組んだ。 ・各学年で行った人権学習を、人権参観を中心としてホームページ等を通して保護者への啓蒙を行った。また、人権参観後には参観した保護者の感想を集いていただき、それを児童と共有したことが学習の深まりへと繋がった。 ・人権参観で三木市指定教材を扱うことが徹底できなかった。 ・学年の実態に応じて、兵庫県版道徳教育副読本を用いて家庭でも考える機会を持った。 ・人権週間やオンラインでの人権集会では、ハートフル運動での優しさや人権作文、標語、ポスターの紹介を行い、周りの人への思いやりについて考える場をもった。 ・サイバー犯罪から身を守る方法について、講師を招聘して学習したり、ネットモラル教材を用いた指導を行ったりすることで道徳性の涵養を図った。 ・スクールカウンセラーによる「アサーショントレーニング」「アンガーマネジメント」の授業を行った。 ・新型コロナウイルス感染症に対する正しい理解を深め、誹謗・中傷等を防ぐために日常的に学級や学年、全校での指導を行った。 ・道徳の授業の展開や評価の仕方について講師を招聘して研修を行った。 ・3校合同オンライン講演会で、保護者と共に職員も人権研修を積むことができた。	A	人権推進計画に基づいた指導を推進していけるように、日常的に意識を高めて取り組む。 ・SNSに関連した問題は社会的に増加傾向にあるため、引き続き、ネットモラルに関する指導を行っていく。 ・スクールカウンセラーによる授業や職員研修を引き続き実施して、児童の内面理解につなげる。 ・道徳的実践力を育てる「考え、議論する」道徳授業の在り方等について計画的に研修を行い、道徳教育の要となる道徳の時間の充実を図る。 ・新しい生活様式に合わせた学校行事や体験活動の中でも、優しさや思いやりなどの道徳的心情や実践力を育てる指導を計画的に行っていく。 ・新型コロナウイルス感染症に対する正しい理解を深め、誹謗・中傷を防ぐため、引き続き学級で計画的に指導を行う。 ・保護者にも同和問題に対する理解を深めてもらうため、引き続き来年度も人権参観では三木市指定教材を扱うようにする。（4年生以上）	・人権学習やオンラインによる啓蒙活動など、児童・保護者・教職員も一緒になって取り組むことで、より一層人権の大切さ・周りの人への思いやりの大切さについて学習することができる。このような取組は評価に値する。 ・道徳と人権教育は、人間関係づくりの基礎となる学習であるため、今後も学校の最重要課題として捉えて取り組んでいただきたい。 ・SNSなどによるいじめや、新型コロナウイルス感染症に対しての誹謗中傷等は十分身近な問題として考えられるため、引き続きネットモラル教材等を活用した指導を願いたい。 ・外国にルーツを持つ児童と共に学習することは、児童にとって文化・言葉の違いを直接理解する良い機会となっている。 ・自己評価Aは妥当である。
特別支援教育	○個に応じた指導の充実 ・支援を要する児童について研修を深め、適切な教育的支援を行い、合理的配慮を組織的に推進し、指導の向上を図る。 ・どの子も達成感が持てるよう、ユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業づくりに取り組む。 ・関係機関や保護者との連携をとり、就学前から卒業後へとつないでいく切れ目ない支援体制を整え、児童、保護者のニーズにあった支援を心掛ける。 ・感染症対策により、大きく変わった環境に対応できるよう、分かりやすい指導・支援を心掛ける。 ・外国にルーツを持つ児童の日本語指導を行い、よりよい学校生活がおくれるように支援する。 ○インクルーシブ教育システム構築のための取組の充実。 ・授業や行事等、機会をとらえ、互いを認め合い、支え合う仲間づくりを計画的に推進するため、生活指導委員会、教育支援委員会、日本語指導委員会等、支援が必要な児童の様子を一括できる様式にし、情報共有して組織的に指導していく。 ・インクルーシブ教育システム構築に向けて、道徳や人権教育等と連携して進めていく。	・関係機関と連携するとともに、指導、助言を個に応じた指導に生かした。 ・こども園、幼稚園等との連携は積極的に行っている。中学校との連携も進めているがまだ十分とはいえない。 ・校内研修を行い、それぞれの学級でICTを活用することにより、どの子も達成感を持てるような授業づくりができつつある。 ・外国にルーツを持つ児童の日本語指導を、数名の担当者が互いに協力し合い、個に応じた指導ができた。 ・校外等の研修も参加できるようになり、研修内容をもとに児童の支援にあたることができた。 ・新型コロナウイルス感染対策について、子どもたちに分かりやすい指導を心がけ、全職員で同じように指導ができるようになった。 ・外国にルーツのある児童も多く、さらに転入生などもあり、学校からの情報を、子どもだけでなく、保護者にも分かりやすい説明やサポートする必要があった。 ・毎月、教育支援委員会、校内支援委員会を開催し、児童全員の支援の体制や方法を検討し、指導に活かした。 ・生活指導委員会、教育支援委員会等、支援が必要な児童の様子を一括できる様式にし、より情報共有を効果的に行えた。 ・ほとんどのクラスが特別支援の交流学級となり、子ども同士の関わりが持てるようになってきたので、少しずつ子ども同士の理解が進んできた。	A	・合理的配慮と教育的支援についての研修の機会を増やし、具体的な事例などを基にして、各学級での合理的配慮の実践例を広め、指導の向上を図る。 ・関係機関と連携しながら、保護者との相談を密にしていき、個別の教育支援計画の充実を図り、児童、保護者のニーズにあった支援を心掛ける。 ・切れ目ない支援体制をとどのようなために、サポートファイルの研修を積み、就学前から卒業後へと繋いでいき、中学校との連携を密にしていく。 ・特に外国にルーツのある児童は、日本語指導や新型コロナウイルス感染対策などを含めた家庭への支援についても関係機関等とも連携しながら支援していく。 ・情報共有をする様式については、効果的であったため継続して使用していく。 ・特別な支援を要する全ての児童の個別の教育支援計画と個別の指導計画を作成し、支援の充実を図る。 ・学校全体で、様々な特性を持った児童がいることを知る機会を増やし、それを認め合える学級経営を基に、組織的に推進していく。 ・「インクルーシブ教育システム」の構築に向けて、道徳や人権教育等と連携して進めていく。	・コロナ禍で対面で交流するのが難しい中、特別支援学級児童の交流の活発化や個別指導等、インクルーシブ教育システム構築に向けて、教職員が協力して支援体制に取り組んでいることは評価に値する。 ・学校行事で、通常学級児童の特別支援学級児童への関わりを巡回見ることができた。アンケート結果にも表れているように、色々な友だちと優しい気持ちで接している児童が多い。 ・外国にルーツのある児童が増加している中、日本語指導などの個に応じた指導が、組織的に行われている。また、その保護者にも理解を得るための努力が行われており、その姿には敬意を表したい。 ・サポートファイルの活用等、ご配慮・ご協力頂いて中学校との連携をとりながら、切れ目のない支援体制を構築しようとしていることは評価に値する。 ・自己評価Aは妥当である。
健康 安全教育	○心身の健康づくり体力づくり○感染症対策 ・新型コロナウイルス感染及び拡大のリスクを低減する。また、熱中症対策など健康確保に向けた取組を行う。併せて、健康づくりを意識し自ら取り組むことができるよう掲示や指導等の工夫を行う。 ・家庭での健康観察を通して、自己管理能力を高める。 ・楽しい体育、適度な運動量を確保できる体育の授業作りに努め、また、定期的に運動する機会を確保すること（全校体育）で児童の体力の向上を図る。 ・子どもたちが主体的に計画する体育イベントを開催し、児童の健康づくりや仲間づくりの意欲の向上を図る。 ・安全・健康・食育・保健体育教育への関心を高め、家庭と連携した取組の充実化を図る。 ○安全指導 ・関係機関と連携を図る等、安全教育を推進する。 ・防災訓練（大雨・地震）や防犯訓練（不審者対応）の内容を工夫して、危険予測能力や危険回避能力を高める取組を、家庭、地域、関係機関と連携して取り組む。 ・感染症対策の観点を踏まえ、配膳や食事中の安全面・衛生面に考慮した、給食指導を継続的に行う。	・長期欠席や休校に備えて、健康観察や学習課題にオンラインで取り組めるよう準備を進めた。 ・「すぐーる」でコロナ関係の感染予防にかかる登校基準など、状況に応じ、こまめに配信している。 ・健康診断は、密を防ぐために距離をとって整列させる等感染症対策を十分に講じた上で実施した。 ・毎朝の体温測定を含む健康観察を徹底して行い、児童の健康状態の確認に努めた。また、環境衛生のために毎日、児童・職員、スクールサポートスタッフによって、校舎内の消毒作業にも努めた。 ・場面に応じたマスクの着用や換気、外遊びの推奨などについて、保健指導や毎日の放送で意識できるようにした。 ・校内では健康観察や給食指導、歯っピー大作戦、腰骨タイムなどの継続した取組によって健康づくりを意識させた。 ・体育科の授業は、運動後の手洗い・消毒をすることや可能な範囲で密を避けることなど感染予防の意識を持たせた上で「運動量のある体育」の実践に努めた。 委員会主催での全校交流遊び、大縄大会では全校生が参加できる体づくり仲間作りを実施した。 ・クラスでの安全教育（指導）はもちろんのこと、毎朝職員の校門での登校指導・下校指導・地区児童会での安全旗の使い方、交通安全教室、トラック巻き込み実験による交通安全面に関する安全指導に取り組んだ。 ・地震の避難訓練を実施するとともに学年のカリキュラムに応じた防災教育に取り組んだ。また、職員を対象に、講師を招いての不審者対応訓練を行った。 ・定期的に校外補導を実施し、下校後の児童の実態把握に努めた。 ・学級指導や委員会活動として児童が放送でマスクの着用・熱食を呼びかけるなど感染症対策の重要性が全校生に伝わるように給食指導を日々徹底して行った。 ・給食準備中に、学校給食栄養士による給食の栄養指導や行事食の紹介などの巡回指導を行った。	A	・基本的な生活習慣の確立、ストレスマネジメント、危険予知能力など、学んだことを人生や社会に活かせるような健康意識を育成する取組を引き続き行う。 ・腰骨タイム・給食指導・感染症予防など継続した指導を行う。 ・体育イベントを開催し児童の健康づくりの意欲の向上を図る。 ・委員会活動等で多くの学生の児童が外に出るきっかけを作ることで、外で遊ぶことが好きな児童が増えるようにする。 ・防犯ブザーやヘルメットの着用を推進するため、家庭への呼びかけ、交通事故防止や学校内外の安全について、啓発を図る。 ・引き続き外部関係機関との連携を図り、安全・防災教育の内容を深める。 ・防災教育のカリキュラムの充実を図り、学期に1回の避難訓練（火災・不審者対応・地震）を行うことで、防災や減災の意識を高める。 ・ストレス・いじめ、偏見等に対し、十分配慮した指導に努める。また、心のケアが必要な児童の心身の健康に適切に対応する。	・日々の健康観察や状況に応じてのマスク着用、校舎内の消毒作業や保健指導など、児童の健康を十分に考えた取組は評価に値する。また、外遊びの推奨は、健康な体作りや遊びの通じて様々な動作や運動が経験でき、コミュニケーション能力の発達や集中力の向上にも繋がるので継続した取組を希望する。 ・コロナ禍での、子どもたちの健康への様々な配慮・対応には満足している。 ・交通安全教室や避難訓練は児童の命を守ることにつながる活動であるため、今後も引き続き外部機関との連携を図り、内容の深化に努めて欲しい。 ・自己評価Aは妥当である。
家庭・地域との連携	○地域のコミュニティとして ・オープンスクール、授業参観等（分散による参観等）で、可能な限り学校や児童の様子を公開し、保護者、地域に信頼され愛される学校を創造する。 ・感染症対策を講じた学校行事を実施し、感染対策に気を配りながらの日々の教育活動、メールシステム（すぐーる）による速やかな情報発信などを実施することで、安心される学校を目指す。 ・ホームページや通信、PTA広報誌等を通して積極的な情報発信を行う。校区内に居住されている人材を発掘するなど、保護者や地域の方々に協力依頼して教育活動に活かす。 ・避難所として開設を想定した諸準備を行う。	・感染症の状況を見ながら、学校行事等の児童の様子を個人情報の保護にも留意しながら、可能な限り公開できた。 ・ホームページや学校通信・PTA広報誌等で、児童の様子を伝えた。また、メール配信（すぐーる）でも速やかな情報提供に努めた。 ・登下校の見守り等で、老人会、人の日の垣根隊、PTAの方々の協力を得ることができた。 ・クラブ活動や平和学習に、地域指導者を招き、多様な専門的な方々と触れ合う学習を行うことができた。	B	・感染症の状況を見ながら、地域の方々にもオープンスクールや学校行事等に来ていただけるように、時期や方法など柔軟に対応できるようにする。 ・ホームページや学校通信等で学校行事や児童の姿を継続的に情報発信する。 ・校区内に居住されている人材を発掘し、その情報を引き継ぎ教育活動に活かす。 ・学校と家庭のつながりを構築するための新たな方法を検討していく。	・コロナ禍の中、規制を掛けた中での行事開催等となったが、適切な感染症対策を講じた上で、コロナ禍前の活動状況に近い取組となったこと、家庭や地域との積極的なコミュニティ形成に向け「すぐーる」を活用しての情報発信を行ったことは評価に値する。 ・今後、人材発掘による地域の力を活用できるよう、学校からの情報発信に期待する。 ・ホームページによるさらなる情報発信を期待する。 ・自己評価Bは妥当である。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

今年度もコロナ禍で数値目標が明確化しにくい状況の中で、保護者（第三者）からの評価を加味した上で、観点に沿ったアンケートを実施し、数値化したアンケート結果を3年間の経年比較を行っていることは評価に値する。適切かつ妥当な自己評価がなされている。前年度の改善の方策が十分に活かされた学校評価になっているので、今後も継続して欲しい。より適切な自己評価につなげるために、それぞれの取組の回数を具体的な数値で表記することを期待する。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・小中一貫教育に向けて、小・中学校の教員が交流し授業を行うことは、児童にとっての不安要素の軽減につながる。このような取組の継続を今後も期待する。 ・児童の学力維持・向上に向けて、タブレット端末を活用したAIドリルやコグトレを積極的かつ組織的に実施するなど、様々な取組を行ったことは評価に値する。日頃から一人一台貸与されているタブレット端末を、有効に活用して学習していることが伺える。今後は、さらに個に応じたきめ細かな指導や、家庭でのタブレット端末を利用した学習状況の把握をしていくことも重要である。 ・児童・保護者アンケートの結果からも、日々の学習タイムで取り組んでいる基礎学力は定着しつつあることが伺える。 ・グローバル化に対応できる子どもの育成のため、ALTと連携した外国語活動（外国語）の実施やそれに向けた教職員のスキルアップを積極的に取り組んでいることは評価に値する。 ・児童が見やすい場所に自主学習ノートを掲示するなど、全児童に自主的な学習への意欲付けを行っていることは評価に値する。自主的な学びの充実に向けた取組に今後も期待する。 ・自己評価Aは妥当である。
・「4つの大切なこと」「4つの大事な環境」についての指導は児童にとって理解しやすい内容となっている。また、昨年度と比べ「自由っこの約束」について意識している児童・保護者が増加していることから、指導の成果を感じる。 ・コロナ禍の中であっても、主体的に行動できる児童の育成のため、自由小フェスなどの学校行事において、活動内容を工夫した取組が見られた。このような、人間形成の基礎となる教育活動は評価に値する。 ・学校風土は、とても重要な事柄かつ社会道徳の基本になる部分であるので、次年度以降も児童会活動や異学年との交流活動を通じて醸成させていただきたい。 ・いじめの早期発見とともに早期解決に向けた取組を、今後も保護者と連携しながら推進していくことを希望する。 ・挨拶運動が定着してきており、地域住民に活力を与えている。 ・自己評価Bは妥当である。
・人権学習やオンラインによる啓蒙活動など、児童・保護者・教職員も一緒になって取り組むことで、より一層人権の大切さ・周りの人への思いやりの大切さについて学習することができる。このような取組は評価に値する。 ・道徳と人権教育は、人間関係づくりの基礎となる学習であるため、今後も学校の最重要課題として捉えて取り組んでいただきたい。 ・SNSなどによるいじめや、新型コロナウイルス感染症に対しての誹謗中傷等は十分身近な問題として考えられるため、引き続きネットモラル教材等を活用した指導を願いたい。 ・外国にルーツを持つ児童と共に学習することは、児童にとって文化・言葉の違いを直接理解する良い機会となっている。 ・自己評価Aは妥当である。
・コロナ禍で対面で交流するのが難しい中、特別支援学級児童の交流の活発化や個別指導等、インクルーシブ教育システム構築に向けて、教職員が協力して支援体制に取り組んでいることは評価に値する。 ・学校行事で、通常学級児童の特別支援学級児童への関わりを巡回見ることができた。アンケート結果にも表れているように、色々な友だちと優しい気持ちで接している児童が多い。 ・外国にルーツのある児童が増加している中、日本語指導などの個に応じた指導が、組織的に行われている。また、その保護者にも理解を得るための努力が行われており、その姿には敬意を表したい。 ・サポートファイルの活用等、ご配慮・ご協力頂いて中学校との連携をとりながら、切れ目のない支援体制を構築しようとしていることは評価に値する。 ・自己評価Aは妥当である。
・日々の健康観察や状況に応じてのマスク着用、校舎内の消毒作業や保健指導など、児童の健康を十分に考えた取組は評価に値する。また、外遊びの推奨は、健康な体作りや遊びの通じて様々な動作や運動が経験でき、コミュニケーション能力の発達や集中力の向上にも繋がるので継続した取組を希望する。 ・コロナ禍での、子どもたちの健康への様々な配慮・対応には満足している。 ・交通安全教室や避難訓練は児童の命を守ることにつながる活動であるため、今後も引き続き外部機関との連携を図り、内容の深化に努めて欲しい。 ・自己評価Aは妥当である。
・コロナ禍の中、規制を掛けた中での行事開催等となったが、適切な感染症対策を講じた上で、コロナ禍前の活動状況に近い取組となったこと、家庭や地域との積極的なコミュニティ形成に向け「すぐーる」を活用しての情報発信を行ったことは評価に値する。 ・今後、人材発掘による地域の力を活用できるよう、学校からの情報発信に期待する。 ・ホームページによるさらなる情報発信を期待する。 ・自己評価Bは妥当である。